

拙稿「堀田善衛「メノッキオの話」とカルロ・ギンズブルグ『チーズと蛆虫』(その1)」(in 『海龍』復刊号); 概要

§1 問題の所在など; 同作(初出1983)末尾の「参考文献」Carlo Ginzburg: *Il formaggio e i vermi*. (チーズと蛆虫), に注目。堀田が、1976年の上記作の英語訳 *The Cheese and the Worms: The Cosmos of a Sixteenth-Century Miller*, Routledge and Kegan Paul, 1980. に基づいて本作を執筆したと推定し、とくに同作の主人公である、16世紀に異端審問に告発された北イタリアの粉屋メノッキオの発言内容を、この英訳本と照合した。『チーズと蛆虫』の著者ギンズブルグは、1939年生まれのイタリアの歴史家。

引用のページ数は、堀田テキストが『堀田善衛全集』8、英訳は上記訳に基づく Johns Hopkins UP からの2013刊ペーパーバックを使用; なお、(その1)で一部参照した仏語訳は、本発表では参照しない。

同論 §2 で検討した、メノッキオ発言と英訳との照合箇所は以下の6点。

- 2.1 冒頭の「天国の構想」; 英訳より2文削除, 堀田文1文のニュアンスが英文と少し異なる。
- 2.2 神とは何か, に対するメノッキオの答え; 英文の順序入れ替え, 重要な1文を採用せず。
- 2.3 メノッキオによる世界の根源, 中心, 基本に関する議論; 英訳より2文削除, 堀田文1文の訳語が変。
- 2.4 法王や高位の聖職者をメノッキオが罵倒; 堀田テキストに2文が追加。
- 2.5 聖霊と教会, その他自分の方が神の知っている発言など; 審問の証人証言をメノッキオ発言に改変。
- 2.6 僧職者の商売物; 英訳1文が他へ移動, 1文は内容が異なり, 別の箇所の概要と差し替えたか。

以上のうち注目すべき点は、およそ次の3点。

- メノッキオへのイスラームの影響を過大視(2.1)。
- メノッキオの聖霊信仰(2.5), 並びに霊への強い関心(2.2)を顧慮しない傾向。
- 七つの秘蹟のうち, メノッキオが聖体拝領(communion)の秘蹟だけ認めたことを伝えず(2.6)。

以下本発表では、メノッキオの1回目の異端審問における p. 291 以降(講談社文庫版 p. 203 以降)を見てゆくことになる。堀田テキストの引用のみ、インデントで落として引用する。下線は、堀田テキストと英訳とに異同がある箇所で、英訳に丸括弧で仮訳を付す。

2.7 審問官の三位一体の問いに対して、彼は聖霊に関する私見を述べる

2.6に続く箇所(p. 291)。堀田テキスト↓では、審問官との対話となっている。司教代理が聖餅を作っているのをメノッキオがただのパンではないか、と言ったという話から(←Mが司教代理と審問以外で会う可能性ない?), 自分はパンのなかに聖霊が入っていると付け加えた、と審問官に告げた後が、次のような対話となる。

— されば、聖霊というものが在るとどうしてお前は信じるのであるか?

『精霊が神だと思ふからであります。』

— 三位一体というものが何体で出来ておるか知つとるか?

『左様でございます、父と、子と、聖霊でございます。』

— では聖餅のなかに姿をかえて入っておるものは、このうちのどれじゃと思ふか?

『聖霊でございます。』

メノッキオは断言をした。

『私は信じております、キリストよりも聖霊の方が大きいと思います。キリストは人でありますのに、

聖霊は神の手から参ったものでありますから。私はこうありたいものと思っております。大いなる神を信じ、イエス・キリストがユダヤ人たちに、如何なる法を守るのか、と問われたときに答えたように、“神と汝の隣人を愛せよ”，これでございます。神の偉さは、すべての人々に同じように聖霊をお与えになったことでございます，キリスト教徒にも，異端派にも，トルコ人にも，ユダヤ人にも。（この後，2.6の前半下線部，僧職が悪魔のように，が続く）』

この引用箇所は，前半と後半とで出典が異なる。前半は，原書パート6で，2.6での先の6つの秘蹟の話題に続いて，聖体拝領の秘蹟についてメノッキオが批判していないこと（したがって，7つの秘蹟の全部がなぎ倒されてはいない）の後，司教代理が聖体拝領に関してメノッキオを審問したことになる（英訳 p. 10）。

And the vicar, incredulous, asked, "What do you believe the Holy Spirit to be?" Menocchio replied, "I believe it is God." But did he know how many persons were in the Trinity? "Yes, sir, there are the Father, the Son, and the Holy Spirit." "Into which of these three persons do you think the host is changed?" "Into the Holy Spirit." Such ignorance seemed incredible to the vicar. "What did your parish priest say was in the most holy host when he preached about that most holy sacrament?"（お前の教区の司祭は，最も聖なる秘蹟について説教した時，その聖餐式のパンに何が入っていると言ったか？） But it wasn't a matter of ignorance on Menocchio's part: "He said that it is the body of Christ, but I believed nevertheless it was the Holy Spirit."（彼<教区の司祭>はそれがキリストの体であると言ったが，私はそれにも拘わらず，それが聖霊であると信じた） because I believe the Holy Spirit is greater than Christ, who was a man, whereas the Holy Spirit came from the hand of God."

第1の下線は，審問官である司教代理が，メノッキオの教区の司祭が聖体拝領の秘蹟におけるパンの中に何が入っているか問うたもので，七つの秘蹟の話と関連づけられていない堀田文とは異なる（そもそもメノッキオは，司教代理が聖餐式の準備をする所に立ち会ったことはないであろう）。第2の下線は，堀田文で「キリストよりも聖霊の方が大きいと思います」と一つ後の文章のみ採用されて削除されたが，教区司祭がパンの中にはキリストの体が入っていると言ったが，自分は聖霊であると信じた，と事実関係をおさえた表現。

堀田文の「私はこうありたい…」から後が，原書で同パートだが，英書 p. 9 に戻る。下線部↓は堀田文に無し（抽象的で分かりにくいからか）。

"I would want us to believe in the majesty of God, to be good, and to do as Jesus Christ commanded when he replied to those Jews who questioned him about what law was to be kept: 'Love God and your neighbor'. For Menocchio this simplified religion didn't call for confessional restrictions.（メノッキオにとって，この単純化された宗教は告白の制限を必要としなかった） His impassioned exaltation of the equality of all religions was based on the idea that illumination was granted to all men in equal measure-"the majesty of God has given the Holy Spirit to all, to Christians, to heretics, to Turks, and to Jews; and he considers them all dear, and they are all saved in the same manner:

2.8 その前の箇所に出る書物リストに起因するであろうという設定のメノッキオ発言など

前の箇所に出ていたのは俗語聖書，デカメロン，コーラン（クルアーン）の俗語訳，マンデヴィルの旅行記（pp. 293f. ; なお，原書パート 12，英訳 pp. 27f. にはもっと多くの書名が出されている）。堀田テキストでは，そのうちの主なこの4書をメノッキオが読んだ可能性を踏まえて，次の発言が引用される（p. 294）。

『地上には多くの人種と，異なる土地に異なる法があり，みなそれぞれがそれぞれの島，あるいは国にあって，それぞれ別々の信仰に生きているのであります。神は彼等のすべてを愛し，ヨブが神に仕えたように，神は彼等の奉仕をよしとされるものでございます。私どもは神が彼等のうちのいずれを愛し，いずれを嫌われているかを，知らないのでありますから，また神は，自らおつくりになった創造物を嫌われる筈がないのでありますから，私どもはひとしく，この神に祈らなければならぬのでございます。』

原書では，パート 22 でマンデヴィル旅行記の概要として説明されている箇所↓に類似。英訳は 46f.

Mandeville urged a boundless tolerance toward these people: "although they (the inhabitants of the islands Mesidarata

and Genosaffa) do not possess the articles of the faith totally as we do, nevertheless because of their good intentions I believe, in fact, I am certain, that God loves them and welcomes their services, as he did Job's. (マンデヴィルは、これらの人々に対して限らない寛容を求めた：「彼ら<メシダラタ島とジェノサファ島の住民>は、われわれのように信仰箇条を完全に持っているわけではないが、それでも、彼らの善意のゆえに、神が彼らを愛し、ヨブのように彼らの奉仕を歓迎されると、私は信じている」(中略) ... we must not hate or feel scorn for any Christian people due to the difference of their law, nor judge any of them. (.....私たちは、キリスト教徒を、その律法の違いによって憎んだり軽蔑したりしてはならないし、裁いたりしてはならない) On the contrary, we must pray to God for them because we neither know whom God loves nor whom he hates, since God does not hate any creature that he has made.....”

2つ目の下線部、英語訳の律法の異なるキリスト教徒、は意味が取りにくい。堀田テキストでは日本人に分かりやすいようにという配慮からか、堀田が旅行記をこの一文を削除したのではないか。

その後、堀田によるモンテーニュの参照(p. 294 ; 次節で言及する)、冒頭の“天国の構想”前半の繰り返しがあつた(p. 295)後、結審となり、メノッキオが牢の中で審問官に書いた長い手紙の要約がある(p. 296 ; 原書では、パート 44 で手紙の全文を転記していた)。堀田文で「マニケイズムその他」、「オリゲネスの異端説」云々(p. 296)とある判決文の概要は、ギンズブルグ本パート 46 から大きく外れてはいない(→本ハンドアウト末尾で再び検討する)。

2年後の1586年1月に家族の嘆願状により出獄。その後、その後、教会の世話役代表、課税評価人を選ぶ議員に選出されたこと、村の子どもに読み書きを教えたり、楽隊の一員となったりしたこと(p. 297) ; 原書ではパート 46 から 48 辺り。

2.9 二度目に異端審問所に通報された根拠となった会話

1596年、共に楽隊屋を務めたルナルド某なるヴァイオリン弾きとの会話↓により、異端審問所に通報された(pp. 297f. ; 下記引用箇所はその途中からで、p. 298)。なお、ここは引用符が通常のカギ括弧。

(前略)L. 「トルコ人やユダヤ人は、キリストが処女マリアから生れたことを信じやせぬ。」

M. 「それがどうだと言うのだ、キリストが十字架にかけられたとき、ユダヤ人が、“もしお前がキリストなのなら、その十字架から降りてみる”と言った。が、降りなかった。」

L. 「それはユダヤ人の命令に従わぬというところを見せたかったのだ。」

M. 「キリストには出来なかったからだ。」

L. 「じゃ、お前さんは福音書を信じないのかね？」

M. 「おれは信じない。ろくでもないことしか出来ぬ坊主や修道士が、他にすることもないので次から次へとあんなものを書いたのだ。」

原書では、上記の出獄後から順序通りで、パート 49、英訳 p. 93 に相当する。堀田テキストと同箇所より。

L: "(Turks and Jews also believe this), but they don't believe that he was born of the Virgin Mary."

M: "What does it mean, when Christ was on the cross, and the Jews said to him, 'If you are the Christ descend from the cross,' that he did not descend?"

L: "That was so as not to show obedience to the Jews."

M: "It was because Christ wasn't able to."

L: "So then, you don't believe in the Gospels?"

M: "No, I don't. Who do you think makes these Gospels if not the priests and monks, who have nothing better to do? They think up these things and write them down one after another." (彼らは次から次にそれらを考え、書いてゆく)

堀田テキストでは、説明的な「他にすることもないので」が上記下線部に相当する訳文に追加された。

この後、前に彼を告発した司祭が村から追い出されていたこと、新司祭の見解、彼を召喚しようとする動

き、1599年6月に再び逮捕されたことなどが続く(pp. 298f.)。原書では、パート49から52辺りまでと、これも順序通り。

2.10 二回目逮捕後の第一回審問での三つの指輪に関する論

これは、第1回審問の内容、冒頭からである(p. 299)。

『ちょっとお待ちになって下さいまし。私の申しますことに、耳をお貸し願います。』

耳をお貸し云々は、イタリア語では、Ascolta! (聞け) との、ただの一語である。

発議権が顛倒してしまっている。

『むかし、偉い領主がいまして、三人の息子のなかから跡継を決めるにつきまして、領主の立派な指輪を見つけた者が跡継となる、としました。ところが領主が死んでみますと、三人ともが同じ指輪をもっていたのであります。三人ともおれこそが跡継だと主張しましたが、指輪はみな同じで、確かめようがなかったのであります。これと同じことで、父なる神様は、自ら愛されておりました様々な子供たち、すなわちキリスト教徒やトルコ人、それからユダヤ人などをお持ちになっていまして、彼らがおのおのそれぞれの法によって生きるための意志を、お与えになったのであります。そうして私たちは、どの法が正しいかを、知らないのであります。私が、私はキリスト教徒として生れたのでありますからキリスト教徒として生きたい、と申しましたのは、いま申しました理由によるものでございます。もし私がトルコ人として生れたのならば、トルコ人として生きたいものと考えるでありましょう。』

原書では、パート23へと大きく戻っている(原書では前の方に当たるが、二回目の逮捕時のこととされていた)。英訳ではp. 47。

堀田文で冒頭の下線部は、英訳本ではこの対話が終わってから、次の段落、3つめの下線部に似た文言が登場するが、当然イタリア語は出て来ない。英文冒頭の下線部は、堀田文の後の下線部に対応する2番目の下線部で繰り返される。“耳をお貸し願います”も、2回繰り返される。

After admitting having said in the past ("but I do not know to whom") that he had been "born a Christian, and so desired to live as a Christian, but if he had been born a Turk, he would have wanted to remain a Turk." Menocchio added: (メノッキオが過去くしかし、誰に対してかは知られていない)に「キリスト教徒として生まれ、キリスト教徒として生きることを望んだ、もし彼がトルコ人として生まれていたら、トルコ人のままでいたかっただろう」と言ったことを認めた後で、〈彼は付け加えた〉: "I beg you, sir, listen to me. There was once a great lord who declared his heir would be the person found to have a certain precious ring of his; and drawing near to his death, he had two other rings similar to the first one made, since he had three sons, and he gave a ring to each son; each one of them thought himself to be the heir and to have the true ring, but because of their similarity it could not be known with certainty. Likewise, God the Father has various children whom he loves, such as Christians, Turks, and Jews and to each of them he has given the will to live by his own law, and we do not know which is the right one. That is why I said that since I was born a Christian I want to remain a Christian, and if I had been born a Turk I would want to live like a Turk." (中略)

This is an extraordinary moment, even in a trial like this, extraordinary from beginning to end. The roles have been temporarily reversed, Menocchio had seized the initiative and attempted to persuade the judge: "I beg you, sir, listen to me."(このような裁判でも、最初から最後まで異常な瞬間である。メノッキオは主導権を握り、裁判官を説得しようとした:「お願いです、私の話を聞いて下さい」)。

2.11 三つの指輪の話が『デカメロン』から来ており、ローマの異端審問がその宗教論議に厳しかったと解説された後、とくに説明なしに次が引用

堀田テキストではp. 300, 結果的に、2.10の繰り返しになっている。

『大いなる神は、キリスト教徒にも異端派にもトルコ人にもユダヤ人にも、すべての人に聖霊をお与

えになり、彼らのすべてを大切なものにお考えになり、従って彼らのすべては、同じように救われるのであります。』

原書では先と同じパート 23、英訳は p. 48 に相当。下線部が堀田テキストには無し。

And just as it did for those contemporary thinkers, Menocchio's position on tolerance had a positive content: (そして、同時代の思想家たちがそうであったように、メノッキオの寛容の立場には肯定的な内容があった) "the majesty of God has given the Holy Spirit to all, to Christians, to heretics, to Turks, and to Jews; and he considers them all dear, and they are all saved in the same manner." ;

ここも抽象的表現だから削除したのか(tolerance の意味はギンズブルグ本の後の箇所によれば、マンデヴィル旅行記で描かれたように、遠隔地であっても自然な神が共通して存在するという観念を念頭に置いたのか)。

しかし堀田文では、地の文としては採用しなかった“those contemporary thinkers”に影響されたのか、少し後に、「フランソア・ラブレイやモンテーニュも、メノッキオからそう遠いところにいたわけではない」(p. 300)と付記される(↳ 3 で後述)。

なお、二回目逮捕の後の審問内容は、堀田テキストでは 2.10 および 2.11 が主なもので、頁も全集版で pp. 299f. で、2 頁余りと少ないことが注目される。原書では、全 62 パートのうちパート 52 より後である。

3 ギンズブルグ本に無いと思われる表現 (主なもののみ引用する、頁数は『堀田善衛全集』第 8 巻)

冒頭の数行(p. 283)；西欧の近世初期、あるいは中世末期の古文書関係の文献などをぼつぼつ読んでみると、キリスト教世界に対する、イスラムの側からの影響が意外に大きなものであったことを知らされて、それこそ意外な思いをさせられることがある。

スコリオ作の詩「七年勤行」(ギンズブルグ本 58 より)より後の箇所(p. 284)；神は雌雄同体の存在であり、両手をあげて掌をひらけば、指からは甘い水が川となって溢れて出て来る。そうしてこの後に、蜜、砂糖、白いパン、甘い水、バター、ヤマウズラ、美酒、寝台などの形容が続々と出て来るのである。

すべて、ヨーロッパの厳しい気候と貧窮に堪えて生きていた農民たちにとっては、無いものばかりであった。寝台でさえが、農民たちもが使えるようになったのは、せいぜいで十七世紀、あるいは十八、十九世紀に入ってからのことであった。

美しい宮殿、美しい召使たち、すべて金と絹と—これらは、まことにグラナダのアルハンブラ大宮殿を思わせるものであり、マホメットのコーランの一節を、これに加えれば、この天上楽園は完結するであろう。

そういう人たちは潺々(せんせん)と河川流れる楽園に入れて、そこに永久に住みつかせてやろう。そこでは清浄な妻を何人もあてがおう。そして影濃き木影にはいらせよう。(井筒俊彦訳)

これらの農民的ユートピアは、天国の構想がキリスト教の側において、農民たちの夢を満たすにはあまりに貧しかったことから出て来たものであったかもしれず、またキリスト教の諸経典があまりに罪や罰のことばかりを言いたてすぎていることに、理由があったものかもしれない。仏教の極楽浄土と、その贅と美を競っているかのようなのである。《←最後の文章、仏説とクルアーンとが競っている、の意味か?》

コーランはすでに、十六世紀の前半にヨーロッパ各地の俗語に訳されていて、版本として市販されているところもあったのである。

メノッキオ「天国の構想」(2.1)およびスコリオ「七年勤行」などについての小括(p. 285)；そこにはヨーロッパの農民に深く根付いていて、ドグマと儀礼によってすべてを取りしきろうとするキリスト教に、容易になじもうとせず、自然の移りかわりに忠実であろうとする、前キリスト教的宗教感情が生き生きと息づいている；cf. 全く文脈が異なるが、原書パート 36 には、審問官の司教代理がメノッキオの矛盾を突く中で、前キリスト教的な

民間信仰のこだま云々、といった文言がある；cf. 英訳 p. 67；But the vicar general was asking for something very different from a fleeting allusion to the traditional image of paradise—accompanied, moreover by an echo of the popular belief, pre-Christian in origin, that the souls of the dead are "dispersed about the world". (しかし、司教代理が求めているのは、伝統的な楽園像へのつかの間の暗示とは全く異なるものだった—しかも、死者の魂は現世に散らばっているという、キリスト教以前の民間信仰のこだまを伴ったのである)；←堀田は pre-Christian だけ取ってきたのか？

日本人の読者向けにプロテスタントの解説をする(p. 289；堀田テキストでは最初に逮捕される前のこと、2.5 の後)；日本で、カトリックを旧教とし、宗教改革派＝プロテスタントを新教とする訳し方を誰が一体創始したのか、筆者はつまびらかにしないが、よい加減な訳であると思う。プロテスタントは文字通りにはローマ・カトリック教会に対する抗議派なのである。旧や新が問題なのではなくて、ローマに対する抗議が問題なのである。それは旧と新の関係ではなく、敵対関係であった。そうして、この当時において、ローマ側の反宗教改革にかけられていた熱意、あるいは敵意は、コンコルディアの司教代理の、放っておいてよいのではないかという寛容さを、はるかに越えたものであった。

モンテーニュが言及される箇所(pp. 294f.；2.11 のすぐ後)；『新しい世界』の問題が強烈な衝迫をもってうちかかって来ていたのは、何もモンテレアール村の粉屋に対してだけではなくた。同じ年に南西フランス・ペリゴール地方の領主ミッシェル・ド・モンテーニュもまた、新しい世界に住む新しい道をもった人間の問題によって、同一の相対論的危機を経験していたのであった。

—われわれはペリゴール人である、あるいはドイツ人であると同じ資格において、キリスト教徒なのである。

ここに一つの、秘められた嘆声が出ていないであろうか。われわれはペリゴール人、あるいはドイツ人であると同じ資格においてしか、キリスト教徒ではありえないのではなかろうか。普遍絶対世界における普遍絶対キリスト教というものはありえないのではなかろうか、という.....

{cf. 下線部↑と似た箇所；パート21でマンデヴィル旅行記への参照を踏まえてのモンテーニュへの言及として...}

p. 43；In these same years a nobleman of Perigord, Michel de Montaigne, had experienced a similar relativistic shock while reading accounts of the natives in the New World.

{↑；<同じ年、ペリゴールの貴族>ミッシェル・ド・モンテーニュは新世界の原住民に関する記述を読んで類似の相対論的なショックを経験した}

拷問と処刑の描写の直前、著者によるメノッキオ評価(p. 300)；ボッカチオに代表される都市知識階級の高度な文化と、地下に底流していた農民文化とは、ここに、一点に収斂している、という見方も可能であろう。フランソア・ラブレイやモンテーニュも、メノッキオからそう遠いところにいたわけではない。{←英訳本 p. 48 の“同時代の思想家<those contemporary thinkers>”からの連想と思われることは、前述した}

最後の数行(pp. 300f.)；かつて筆者の住んでいた、スペイン・カタルーニア地方のある村の牢獄は、二十メートルほどの断崖の中ほどに横穴を穿ち、鉄格子をはめ込んだものであった。十九世紀半ばまで使われていたという。

4 考察；堀田「メノッキオの話」の独自性

今後検討を深める前提として、ここでは以下3点あげておく。

ギンズブルグ本の記述をやや離れても、日本人向けに書いている。

原書英訳を削除・改変した箇所；2.1 抽象的表現とマンデヴィル旅行記参照，2.3 ミカエルら三大天使に関わる記載，“神の子”が獣のように吊された，2.6 と 2.7 ビジネスの問題が法と戒律へ，七つの秘蹟への言及が無い，秘蹟の話題から三位一体に関する審問という流れを無視，聖餅がキリストの体だが自分は聖霊と思う，というメノッキオ証言，2.8 マンデヴィル旅行記における2つの島に関わる描写，律法の異なるキリスト教，2.11 “同時代の思想家”を含む文章を削除，別箇所でもンテーニュらに言及 etc.

原書英訳に書き足した箇所；2.4 神の悪口はいけない，2.9 他にすることもないので，2.10 “耳をお貸し願います”のイタリア語，etc.

全く新しい記載；(主なもののみ) 井筒俊彦訳コーラン(p. 284)，カトリックとプロテスタントとの違い*(p. 289)，ラブレイと併記してのモンテーニュ言及(p. 300)，etc.

{*最初の逮捕時の判決文として堀田は、「告解は単に神に直接すれば足りるというメノッキオの主張は、宗教改革派のものであることから始まり」<p.296>とする。これは、判決文が紹介される原書パート 46 で、Only with regard to Menocchio's remark that for confession it sufficed to tell one's sins to God, did they recall the similar teaching of the "heretics", namely, the followers of the Reformation. (懺悔には自分の罪を神に告げれば十分だというメノッキオの発言に関してだけ、彼らは“異端者”，すなわち宗教改革の信奉者たちの同様の教えを想起した；英訳 p. 87)と対応するか。ただし、引用文中の“異端者”の同様の教え(the similar teaching of the “heretics”)とはルーテル派の他、この文章の前に異端裁判例として出る、ウィッチ、ベナンダンティ、アナバプティストらを含むと思われ、プロテスタント(ルーテル派)のみを指すとは思えない。むしろ、ギンズブルグ本によれば判決文の要点は、その前の箇所に出て来る、三位一体説への攻撃 (“...you commenced to battle against the most holy ineffable Trinity.”)；お前は最も神聖で言葉では言い表せない三位一体と戦い始めた；英訳 p.87)であった模様。判決文でこの後に出て来るマニ教、オリゲネスの異端などについては、後述}

メノッキオに対してのイスラームないしコーラン(クルアーン)の影響を過大視；これは、冒頭の“キリスト教世界に対する、イスラームの側からの影響が意外に大きなものであった”(全8, p. 282)から、一貫している；e. g. 「華麗なイスラーム風天国構想」云々(p. 295).

ギンズブルグ原書では、メノッキオが俗語訳クルアーンを読んだ可能性を示唆するも、審問での証言においてその影響が明確に認められるといった指摘はない。Mの天国観(パート 39)についても、拙稿(その1)に記したように、マンデヴィル旅行記からの影響をむしろギンズブルグは強調していた(が、2.1で堀田はその1文を削除)；cf. 堀田テキスト冒頭に出て来た2番目の韻文“七年勤行”(pp. 284f.)は、原書によれば作者のスコリオがクルアーンを愛読していたらしいので、こちらは確実にイスラームの影響下。しかし、メノッキオとスコリオとは完全な同時代人ではなく、スコリオは三位一体説を否定していた由。

以上のように、メノッキオの宗教観におけるイスラームからの影響は、事実と異なり、当時スペインに居たという堀田の思い込みがかなり入っていると思われる；あるいは日本人向けに、意図的にそうしたのか？

堀田の霊的なものへの関心の薄さ；2.7 三位一体に関する審問に見られるように、メノッキオは聖霊に対する思い入れが強かったと推察される。堀田テキストでは、そのことがほとんど留意されない。

2.3 で話題となったチーズと蛆虫の議論を審問の中で司教代理に問われた際(原書パート 25)，メノッキオは蛆虫である天使たちについて，“...and from that light he made those spirits that we call angels, then he chose the noblest among them and bestowed on him all his knowledge, all his will, and all his power, and this one is he whom we call the Holy Spirit, ...” (p. 51；そしてその光から、彼<永遠なる神>は私たちが天使と呼ぶ霊た

ちを造られ、その中から最も高貴な者を選ばれ、すべての知識と意志と力を授けられた、この者こそ我々が聖霊と呼ぶ者である)、としていた。また、その少し前に、司教代理がMの言説におけるチーズから蛆虫へ、そこから天使に、さらにその次の段階とされる、最も至高な尊厳(this most holy majesty)とは何だったのかを問うた時、Mは、"I conceive that most holy majesty to have been the spirit of God who was from eternity."(同頁; 私は、その最も聖なる威厳とは、永遠から存在した神の霊であると考え)、と答えている; ←この2文とも、堀田は採用していない。その姿勢は、2.2でメノッキオが神を息吹に過ぎないと語った1文を堀田が削除したことに類似するであろう;↳ 拙稿(その1) p. 11を参照されたし。

2.7でも、聖体拝領の秘蹟における聖体(パン)を、彼は聖霊であると見なしていた;↳ He said that it is the body of Christ, but I believed nevertheless it was the Holy Spirit (p.10; 彼<教区司祭>はキリストの体だと言ったが、私は聖霊だと信じていた); ←対して堀田は、この文章を採用せず。

§2で見た以外の箇所でも、メノッキオは聖霊について熱く語っていた。例えばパート32で、Mが聖霊を見出せない(This Holy Spirit can't be found)と言ったのでは、と審問官に問いつめられた際、Mは、"...In fact, the stronger faith I have in the world is my belief in the Holy Spirit, which is the Word of the highest God to enlighten the entire world." (実際、私がこの世で最も強く信じているのは、全世界を啓蒙する最高の神の言葉である聖霊への、私の信仰である)と証言した(p. 62); ⇒聖霊概念は、メノッキオの宗教観の中心にあったことは確実であろう。対して堀田は、そう考えられる原書の文言を削除ないし不採用。

2.8の後半では第1回の有罪判決文について、ギンズブルグ原書から大きな逸脱は無いとしていた;↳ 「...マニケイズムその他にも触れ、誰もがひとしく救われるという説は、アレキサンドリアのオリゲナスの異端説であると断定し、...」(全8, p. 296; 講談社文庫 p. 213)

↑マニ教とオリゲナスが有罪の根拠とされたというのは、原書通りなのだが、後者に言及した判決文の英訳はp. 88で、"You brought again to light Origen's heresy that all peoples would be saved, Jews, Turks, Christians, and all infidels, since the Holy Spirit has been given equally to them all..." (お前は、聖霊が彼ら全員に平等に与えられたので、ユダヤ人、トルコ人、キリスト教徒、全ての不信心者のような、全ての民族が救われるだろうというオリゲナスの異端を再び浮き彫りにした)とある。堀田は、...would be saved 辺りまでを採用し、since the Holy Spirit...以降の、(誰もが救われる理由としての) 聖霊が全てに等しく与えられたから云々を削除してしまった。

↑もとより、堀田善衛は『発光妖精とモスラ』(1961)にしても『審判』(1963)にしても、神学というか形而上学的な問い⇒考察が苦手な作家であったと考えられるので(↓)、本作もその延長上なのかもしれない。ただ、堀田がメノッキオの宗教観を描くにあたって、①イスラーム(とプロテスタント)の影響を過大視、②『マンドヴィル旅行記』の影響を過小視、③Mの聖霊信仰(と神の子キリストを重視しないこと)を等閑視、という少なくとも3点は、かなり意図的であろう;↳ 神学面に弱いかからか、日本人向け創作という意図なのか。

由谷裕哉「堀田善衛「メノッキオの話」とカルロ・ギンズブルグ『チーズと蛆虫』(その1)」、『海龍』18, 2024. 2

——「中村真一郎・福永武彦・堀田善衛『発光妖精とモスラ』における堀田善衛パート」、『群峰』9, 2024.

3

——「堀田善衛『審判』における原水爆観 一登場人物・出音也のモデルを巡って一」、富山文学の会第13回大会(2024. 3. 16)発表資料;↳ <https://researchmap.jp/read0040709/presentations/45827787>